

粛清のソ連とは大違い」 張春橋グループの今後は 自宅学習の毎日、

権力臭など感じられない華国
鋒新主席(左)の笑顔だが……



閉ざされた処刑説 への公式回答

中国の『政権抗争』が発覚して九日後の十月二十一日、北京では「熱烈歓迎、華国鋒同志任主席」の百五十万人デモが繰り

ひろげられた。この政治的セレモニーを見るかぎり、華国鋒の政権奪取劇はほぼ完勝に終わった感じがつよい。

本誌は先週号で、この中国政変は「華国鋒側の逆クーデターではないか」という見解を紹介したが、イギリスの有力紙『ザ・ガーディアン』も十八日、「江青女史のクーデター計画説を裏づける証拠はない。むしろ、いまや故毛主席よりも大きな権限を一手に集中した華国鋒がクーデターを成功させたとの見方を可能にするかもしれない」という注目すべき記事を大きく載せている。

ここで「注目すべき」といったのは、十二日にスクープ記事を書いた『デイリー・テレグラフ』をみてわかるが、今回の権力闘争の報道では英国紙が群を抜いているからだ。

『英国紙のニュース源は、英国

「江青、張春橋ら逮捕」のニュースは世界中を駆けめぐったが、その後がすごかった。「すでに銃殺」から「自宅で軟禁」まで彼らの消息が連日伝えられた。事実はどうなのか。北京ではすでに江青批判百万人デモが始まったが、五十六歳の女史の今後はどうなるのか。

波乱に満ちた彼女の生涯——しかし老後は辛く寂しいものになったようだ。

情報機関なのです。こんどの政変をいちばん早くキャッチしたのは、香港の九竜半島にある英国情報機関の基地で、すぐロンドンに流したわけです。ロンドンでは確認のため北京に打電、それを大使館で『テレグラフ』のウエイド記者がつかんで報道したんですよ」(外務省に近いA氏)

とにかく、江青、張春橋、王洪文、姚文元の文革派グループが完敗したのは事実で、勝ち誇った華国鋒側は彼らを「賊軍」扱いしている。が、問題は負けた四人組の運命である。これについては、中国当局は「完黙」を決め込んでおり、どうなっているのかサッパリわからない。「未確認情報」はある、たとえば、十三日に共同通信が東京から流した「四人処刑」説もその一つ。十五日発の北京DAPは「さる七日、人民大会堂で開かれた党政治局会議の席上、華国鋒が引き入れた保安部隊により王洪文、張春橋、姚文元が射殺され、江青だけ生き延びた」と伝えている。また、『ニューズウィーク』最新号は、ユーゴ特派員の話として「逮捕の際、三人の護衛が撃たれた」と書いている……。

これらハンランする「未確認情報」について、中国研究家の岡本隆三氏はこういう。

「血の江青軟禁」



写真は左から姚文元、江青、張春橋、王洪文

「すでに処刑」説まで乱れとんだが、「生かして反面教師」という毛夫人の運命

「共同通信の処刑説の根拠になつてゐるのは、北京放送の『四人を処刑せよ』という大字報（カペ新聞）が各地にはり出されてゐる」という報道でしようね。たしかに、大字報は党中央の統括のもとに出されるものですが、かといつてそれがすぐ処刑説と結びつくとは考えられませぬよ。ただ、少し気になるのは共同電に対する中国当局の反応で、十四日のロイター電によれば『ノーコメント』とふくみのある回答をしていますからね。

「生き恥をさらさせる」路線

江青派の猛烈な巻き返しにあり、華国鋒が追いつめられれば（処刑が）ないとは断定できませんけど……まあ、いまのところ五分五分でしようかね」
江青一派の逆襲といえば、近着の『タイム』は党中央委による正式な華国鋒新主席への就任発表がおくれている点と結びつけ「党内の急進派と穏健派の権力闘争が未解決であることを示すものかもしれない」と指摘して、政治局に残る文革派の抵抗を暗示しているが……

現在までのところ、「処刑」説をとる中国通はほとんどいない。「軟禁」説がいちばん多い。ある中国研究家がいう。

「中国では一九五四年の高崗事件以来、ほぼ五年おきに政変が起きていますが、ソ連のように粛清即処刑という例はない。むしろ、政治犯を逮捕する過程での武闘で殺されるということはあるが、逮捕したあと処刑することはない。それに、江青らの文革左派はいろんな分野に少数ながら浸透しているので、処刑すれば混乱は増すばかりだからね。党風のち

がいなんだ」

こういつた「反党分子の罪は憎んでも人は憎まない」という党風は、一九四二年に延安で開始された「整風運動」によって確立されたという。しかし、そ

首都圏サラリーマンの新しい毎日をつくる…



日刊ゲンダイ

駅売店・スタンドで発売/40円/講談社

待望の第四部 発売!

青春の門

墮落篇上

定価890円



「人間は生き、人間は墮ちる!」
春浅い北海道をあとに上京した信介の
重く激んだ倦怠の日々。
歌手を目指す織江は去つてゆき、
学友たちは政治運動に青春を賭ける。
訣別の哀しみと、熱い屈辱感の中、
降りつる雨に濡れながら
信介はおのれの限りない虚無をみつめていた。

筑豊篇上・下 自立篇上・下 放浪篇上・下
各850円 普及版各580円 文庫判各240円

社談講

れまでの混乱期には「中国でもソ連の秘密警察にならった処刑が行われていた」(前出・岡本氏)らしい。こうしたソ連と中国の党風のちがいは、ひとつは両国の革命方式の相違からきているという人もいる。

「都市革命のソ連とちがひ、農村革命の中国には、革命功労者が全国各地にちらばっており、そんな仲間を路線の食いちがいなどで粛清したり、処刑できない事情があったんですね」(外報部記者)

故・毛主席は「血の粛清」のかわりに「生き恥をさらさせる」という「路線」をとった。

「中国人の道徳観からすれば、生きて恥をさらすことは、殺されるより不名誉なことです。毛沢東は中国古来のこの道徳観に目をつけ、失脚した幹部を大衆の面前にさらし、反面教師とし

て利用した感じがつよい。その好例が彭徳懷將軍です。彼は一九五九年に右翼日和見主義として追放され、一時は行方不明でしたが、文化大革命の嵐が吹きだすと北京に連れてこられて、市内を紅衛兵によって引きずりまわされました。高崗事件の高崗は、権威をハタ奪されたあと、首つり自殺をしたと伝えられていますが、生きるに忍びなかつたからでしょう」(元北京特派員)

これを評して「西洋の将棋と東洋の将棋のちがいです」という人もいます。チェスでは取った駒は使えないが、東洋の将棋ではまた使えろというわけだ。中国で権力者だった者を殺さないのは、それが権力を奪うルールになつたら困るという知恵が働いているという人も多い。

その「知恵」は華国鋒体制の下でもはたらいているのか、十八日の北京大学には、「毛主席を暗殺しようとした江青らを軟禁」というカベ新聞が登場した。しかし、こんな声もある。「大物を反面教師の手駒として使う」という芸当は、毛沢東にし

江青を批判すれば毛沢東が

しかし、これらの諸説はいずれも「過去の例」から割り出したもので、今回の権力闘争にそのまま応用できるかどうかかわからない。というのも、これまでの「五年ごとの権力闘争」は、みな毛沢東というスーパーマンの下での、いわば「路線闘争」の性格がつよかつたが、今回はムキ出しの「政權奪取劇」だ。そんなドラマは、過去の新中国にはなかつた。とすれば、政敵に対する遇し方も、おのずと変

わつてきて不思議でない。そう考えて、中国から送られてくるニュースを読むと、少し気になるのがある。十八日の北京発共同電は「クレーターの脚本を書いたのは張春橋で、江青はビエロだった」と伝えた。この「中国当局に近い筋」がもらした筋書きは、当然「官軍・華国鋒体制公認の話とみてよい。この情報の狙いは、江青と張春橋ら三人とを区別しようということころにあるようだ。

それは、なぜか。香港在住の中国研究家・C氏は分析する。「中国には『夫人をみれば主人がわかる』という考えがあり、いま江青を公然とやつつければすなわち毛沢東批判につながるわけです。そこで華国鋒側は、本意ながら江青を他の三人と区別する夢に出たと思われませんが、早くいえば江青の処刑はないということでしょうね。もう少しウラ読みすると、他の三人はどうなるかわからない、将来は処刑もありうるということじゃないですか。でも、いまのところは四人とも軍と党に監視されるながら、自宅に軟禁されていると見るのが妥当です……」

江青には、他の三人が持っている武器もある。それは「毛沢東の未発表の言行録」を持っているのではないか」という華国鋒側へ与える無言の恐怖だ。



「偉大な巨人。は黙して語らぬが……」

「中国で実権を握るには、毛沢東語録の『解釈権』を手にするのが絶対条件で、華国鋒もそのためクーデター事件の少し前に

軟禁か「五・七幹部学校」へ

といったわけで、江青一派の運命は流動的なようだが、少なくともいままでのところ、存命中のようだ。

「江青らと同時に逮捕されたと伝えられる三十数人の中級幹部は、おそらく「五・七幹部学校」へ送られるでしょうね。江青らの大物はテイよくいえば軟禁ということになるでしょう」（東京外語大助教授・中嶋嶺雄氏）
この「五・七幹部学校」とは

毛沢東全集と選集発刊のための資料を送れ、と全国に指令を出しています。これだけで華国鋒は解積権を手中にしたと思いますけど、江青に未公開資料の手持ちがないという保証はない。もし江青に、それを別ルートで公開できる背景があれば、華国鋒といえども安閑としておれんわけですよ……」（前出・C氏）

江青ビエロ情報は、必ずしも単純ではなさそうである。

一九六六年、毛主席の指示によって作られた、農業などの労働に従事させつつ思想改造を促す学校だという。

「党中央と國務院が管轄し、全土に百校以上あります。江青ら党中央の幹部は、自宅軟禁のまま、最高人民法院で裁判にかけられるんじゃないですか。文革以降、機能を停止していました。去年一月の人民代表大会で院長に江華が選出されていま

す」（中国研究家・松本昭子氏）
ソルジェニーツィン氏みたい「収容所」へぶち込まれたり「群島」をタライまわしされることはないらしい。しかし、裁判にかけられてもかけられなくとも、江青ら高級幹部はすべての権限をはぎ取られ、中国流の「生き恥」をさらされる。とはいえ、日本の観点からみれば、「自宅軟禁」というやつ、かなり優雅なものようだ。

「こんどの四人は、みな天安門の西側にある中南海という高級住宅街に住んでいます。この一画は高いレンガ塀に囲まれた甲子園より広い住宅地で、樹木も多く建物も外からは見えませんよ。入り口には解放軍の兵士が警備しており、自宅軟禁となれば家のまわりにも何人か立つでしょう。ここで毛沢東思想を徹底的に学習させられるわけで、もちろん、名譽回復があるまでは一歩も外へ出れません。文革で批判を受け、自宅学習を命じられた北京大学長の陸平も、ここにいましたね」（前北京特派員・D氏）

天安門事件で二度目の失脚をした鄧小平氏の場合は、もっとノンビリしていたという。「じつは、彼はずっと北京の南海の自宅にいて、四人の女中と十二人の男に世話をしてもら

いながら、マルクス主義の学習をしていた。いまから思うと、軟禁というよりも実務派が保護したふしもなくもないけど、それにしてもねえ」（外務省に近い某氏）
でも、今回の四人は「政權奪取」を企てた「重罪人」ばかりだ。そんな寛大な自宅軟禁ですむとも思えない。中国研究家・高田富佐雄氏も「もつと厳しくなりそうだ」という。

「江青は例外として中南海か毛主席の別荘に軟禁されるかもしれないが、他の三人は公安部隊の施設あたりへ送られるんじゃないですか。たとえば、彼らが陰謀の会議を開いていたといわれる香山の特別施設など。ここなら一般大衆も近づけない」
もつと厳しい「軟禁」を予測する中国専門家もいる。

「いくら肅清はやらないのが中

国共産党の党風といっても、現に劉少奇、陳伯達のような大物さえ、どこに行ったのかわからないわけですよ。一説では、劉少奇は人民公社へ送られ、そこで労働改造中ガンになって二三年前に死んだともいうが、風説にすぎない。林彪事件に連座した黄永勝、李作鵬、邱会作などの政治局員も不明、スターリン賞を受けた作家の丁玲などは、人民公社で便所掃除させられていたというしね。いや、これは日本人の目撃者がいる……」

それが権力闘争に敗れた政治家たちの末路、といえればそれまでだけど、ひるがえって思うに「三木」とか「反三木」のオジサンたち、なんともハッピーな権力闘争ぶりではある。

訂正 十月二十八日号二十五頁に小坂徳三郎氏とあるのは小坂善太郎氏の誤りでした。

お飲物などにご利用ください
*お食事ルームサービス

XII

オフィスがわりに、
おとくな6時間。

- 書きものなどお仕事に...
- 日頃働きすぎのあなたに...
- 小会議・ご商談に...
- サウナ10%割引

デイトムサービス
12:00-18:00
室料30%割引

銀座東急ホテル

お申込みは ☎03(541)2411 地下鉄東銀座駅下車1分